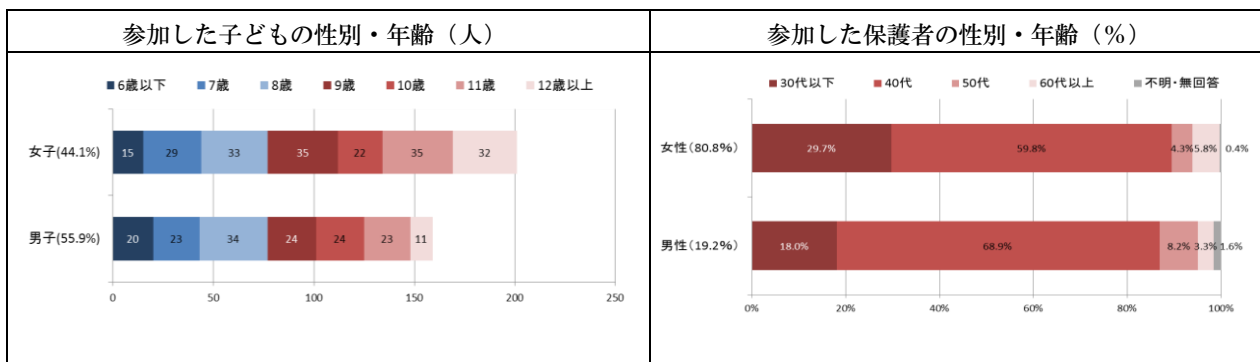


3) 事業効果の検証

事業としての評価を図るため、参加した保護者への記述式アンケート（以後、事後アンケート）を実施した。調査票は、全国モデル実施企業共通とし、すべての実施において、全工程終了後に、調査票配布、記入後即時回収とした。あわせて、同アンケート用紙に、数ヵ月後の再アンケートの協力可否をたずねる枠を設け、承諾した参加者の保護者を対象に、時間経過後の行動変容を詳しく調査するための2次アンケート（以後、モニターアンケート）を実施した（郵送方式）。また、参加した子どもを対象に、体験の記憶や学習した内容を振り返るための事後学習ツールとして「ワークシート」（2種／絵日記型・感想文型）を配布し、任意での返信を依頼した。同調査より、【フードチェーンの理解】【バランスのよい食生活】【不足しがちな野菜の適正量の把握】【和食・食文化への理解の深まり】【プログラム】についての分析を行った。

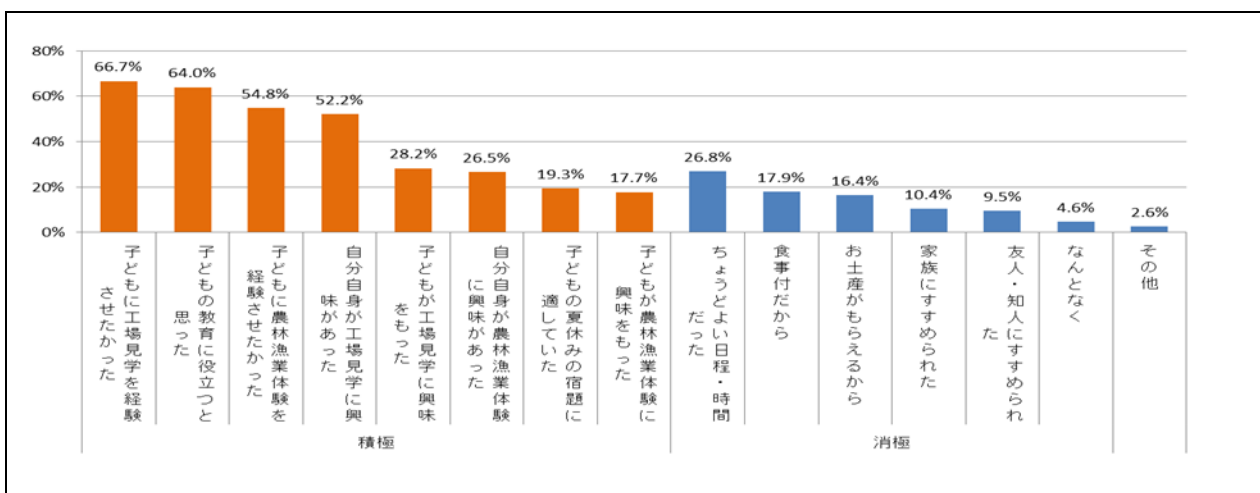
(i) 参加者属性

- ・ 参加した児童は8歳がもっとも多く、男女別では女子がわずかに多い結果となった。
- ・ 回答者（参加児童の保護者）は、女性が8割を占め、40歳代がもっとも多かった。
- ・ 男性の回答者61名のうち、87%が30歳～40歳代の若い父親であった。



(ii) 参加目的

- ・ 参加した目的は、「子どもに工場見学をさせたかった(66.7%)」「教育に役立つと思った(64.0%)」が多かった。
- ・ 参加目的を、教育（食育）目的である「積極群」と、それ以外の「消極群」に分類し、「消極群」をみると、「ちょうどよい日程・時間だった」が26.8%となり、「食事付」(17.9%)「土産付」(16.4%)などのインセンティブを目的とした動機を上回っていた。



(iii) 集計結果・分析

【フードチェーンの理解】

- 参加者の保護者による事後アンケートより、「農産物や漁業にかかわる人の仕事」について、「よく理解できた（「以前から知っていた」を含む）と回答した人の割合は84.3%となった。また、数ヵ月後に実施したモニターアンケートでも「覚えている」と回答した人は8割以上、さらに「確かに覚えていて、第三者に説明ができる」と回答した人は、26%いた。
- 同様に、「製造・加工・物流にかかわる人の仕事」、「産地から食卓までの食材の流れの全体像」、「フードチェーン」という言葉も高い割合で、深い理解が得られている結果となった。

	事後アンケート (n=367)	モニターアンケート (n=115)	
		「確かに覚えていて、第三者に説明ができる」+「なんとなく覚えてはいるが、第三者に説明できるほどではない」	「確かに覚えていて、第三者に説明ができる」
農産物や漁業にかかわる人の仕事	84.2%	88.7%	26.1%
製造・加工・物流にかかわる人の仕事	83.3%	93.1%	27.0%
産地から食卓までの食材の流れの全体像	90.5%	92.2%	20.0%
「フードチェーン」という言葉	88.8%	93.0%	36.5%

【バランスのよい食生活の理解】

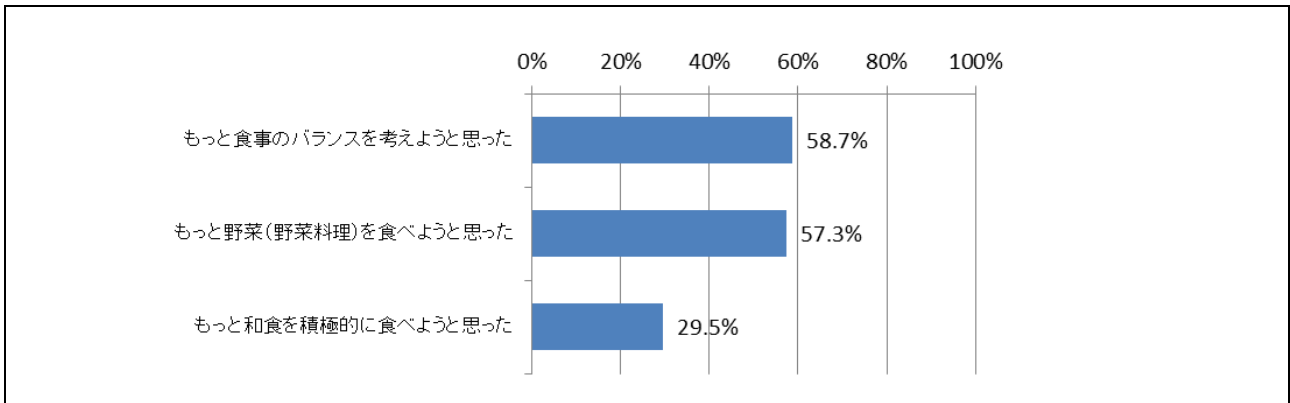
【不足しがちな野菜の適正量の把握】

【和食・食文化への理解の深まり】

- ほとんどの参加者(保護者)は、「バランスのよい食生活」「野菜の適量」「和食の優れた点」のいずれも理解を深めていた。
- また半数前後がそれらの事を第三者に説明できるまで理解を維持していた。

	事後アンケート (n=367)	モニターアンケート (n=115)	
		「確かに覚えていて、第三者に説明ができる」+「なんとなく覚えてはいるが、第三者に説明できるほどではない」	「確かに覚えていて、第三者に説明ができる」
バランスよい食事の大切さ	95.1%	96.5%	54.8%
健康のため1日に食べることが望ましい野菜の量	94.5%	93.9%	48.7%
和食の優れた点	85.3%	94.6%	42.6%

- ・ 半数以上が「もっと食事のバランスを考えようと思った」「もっと野菜（野菜料理）を食べようと思った」と答えており、プログラム参加による食への理解が、今後の健全な食生活への意欲につながっていると考えられる。

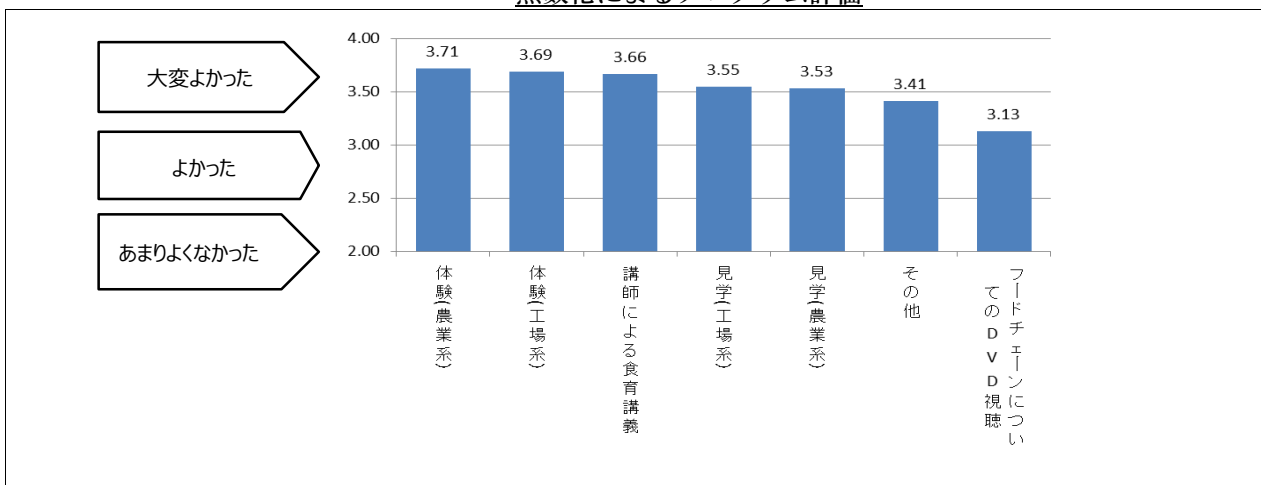


【プログラムの評価】

■ プログラム評価

- ・ 全国で実施した事例は、“農作業体験”もしくは“工場見学”を主軸とし、5 DAY食育インストラクターによる食育指導もしくはバス車中でのDVD視聴のいずれかをセットとした。そこで、どのプログラムの評価が高かったのかをはかるため、回答選択肢「大変よかった」を4点とし、「よかった」を3点、「あまりよくなかった」を2点、「よくなかった」を1点、「よく覚えていない」を0点とし、点数比較を行った。内容の評価としては「農業体験」が最も高く、農業・工場ともに「体験」の方が「見学」より高く評価された。
- ・ 講師による食育講義は、「体験」とほぼ同水準で非常に高く評価されていた。

点数化によるプログラム評価



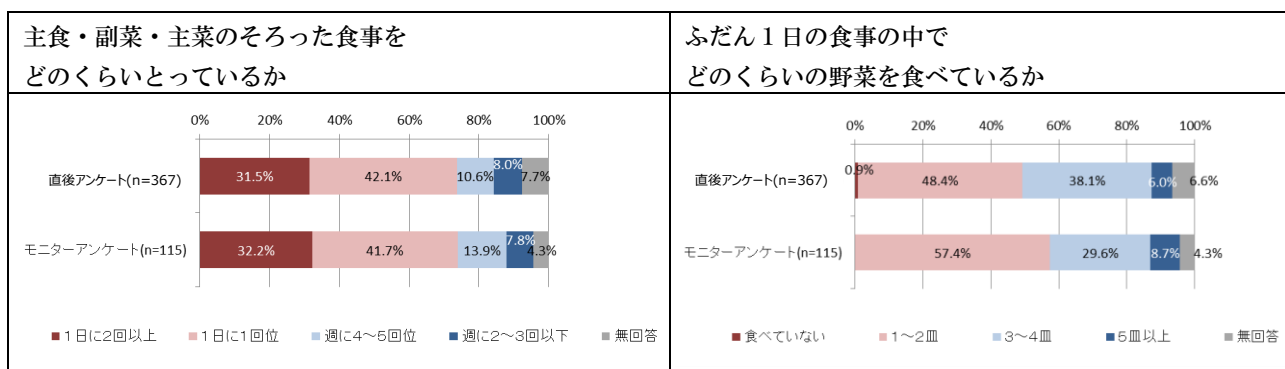
■ 推奨意向

- 当プログラムを人に奨めてみたいかをたずねたところ、「思う」「やや思う」の合計が94.5%となり、強い推奨意向がうかがえた。

思う	79.9%
やや思う	14.6%
どちらともいえない	2.9%
あまり思わない	0.3%
まったく思わない	0.3%
無回答	2.0%

■ 事前・事後評価

- 参加直後の事後アンケート（367人）と、さらに数か月後に実施した協力モニター（115人）のアンケートを比較したところ、「主食・副菜・主菜のそろった食事をどのくらいとっていますか」に対し、「1日に2回以上とっている」と回答した人の割合には、ほとんど違いが見られなかった。（直後：31.5%、数か月後：32.2%）
- （同）、「ふだん1日の食事の中で、どのくらいの野菜を食べていますか」に対し、「5皿以上」と回答した人は、モニターアンケートでは40%の増加となった。一方、「3～4皿」をみると、直後：38.1%、数か月後：29.6%となっており、向上はみられなかった。
- 総じて、今回のプログラムでは、参加者のあるべき食生活への正しい理解を深める点においては大きな目標達成となったが、行動変容はみられなかった。
- 但し、食生活の行動変容の計測については、イベントとの関連性だけではない要因（価格、季節要因、健康状態）が大きく、さらに年代によっても異なる。健康指標と知育評価の指標の切り分けを行うべきと考える。



■ 運営者評価

※10名以下の評価者であったため、統計値としての計測は不可につき、個別のコメント評価を記載した。

(手法の向上)

- ・協力・連携した企業団体との関係性が深まった（4社）
- ・農業体験・食育・料理教室などの断片的だったものがつながった（4社）
- ・初取組のよいきっかけとなった（2社）

(課題)

- ・限られた時間しかない中、食育の講座の時間を盛り込むことは難しい（2社）
- ・予算と人員の確保
- ・売り上げ増へどうつなげるか

(推奨意向)

- ・費用負担があれば
- ・教材やツールの支援があれば

4) まとめと課題

- フードチェーンという言葉の理解、意味も含め、参加者への高い理解促進となった。
- 同プログラムを通じて、新鮮な野菜や、作りたての食材に、見て、触れて、食べることにより、「バランスのよい食生活」「健康のため1日に食べることが望ましい野菜の量」への理解も90%を超える高い数字となった。
- 参加者のアンケート結果、保護者からの自由記述、子どもの感想文や絵日記からも明らかのように、充実した食育プログラムである一方、運営側の費用・時間・日常業務との調整が大きな課題であり、定期的な継続は難しいという声が多く挙げられた。